

自走

特別進学コース主任
平原 澄夫

「2030年の社会を考える」

5月29日付の日本経済新聞第二部に旭化成名誉フェローであり、2019年にリチウムイオン電池を実用化した功績が認められ、ノーベル化学賞を受賞した吉野彰氏が、「2030年の社会を支える君たちへ」というタイトルで、日本の高校生へメッセージを送っています。

「自走（第7号）」では、そのメッセージの一部を紹介しながら、「10年後の社会」そして、「10年後の私たちの姿」について考えてみたいと思います。

世界は今、「第4次産業革命」と呼ばれる大きな変化の中にあります。第1次、第2次の革命では、産業の機械化と電力を活用した大量生産の実現によって「モノの豊かさ」がもたらされました。第3次では、コンピュータやロボットなどITによる生産の自動化・効率化が進み、インターネットも一般に広く普及するなど、「情報革命」が起きたのです。

では、第4次の革命の主役となるのは、どのような技術でしょう。それは、人工知能（AI）やIoT（モノのインターネット）です。技術革新の速度は、確実に速まっています。これまでなら数十年かけて起きていた変化が次は10年で起こる。高校生の皆さんが社会で活躍する2030年ごろまでには、今から想像もつかない未来が実現していると思います。AIやIoTといった技術は、私たちの生活を便利にしますが、特に「無駄をなくす」という側面が大きいと思います。つまり、地球環境問題の解決とも、密接に関わっているのです。

例えば、皆さんの身近なところで言えば、「フードロス（食品廃棄）」という言葉を知っている人もいます。新しい技術を上手に活用することができれば、食料を必要な分だけ供給し、フードロスをゼロにするような仕組み作りも将来は可能になっているかもしれません。第4次産業革命はこのように「地球環境問題を解決し、サステナブル（自足可能）な社会を実現するための革命」と位置付けることができます。

（中略）

私が33歳で研究をスタートさせたころには、今のようなモバイル・IT社会になっていることは予測ができませんでした。それでも、「きっと世の中に必要とされる技術になる」という自分なりのゴールを信じ続けたことが、研究過程でぶつかるさまざまな壁を乗り越える原動力になりました。

歴代のノーベル賞受賞者が、受賞対象となった研究を始めた年齢は、平均すると30代半ばごろだといわれます。社会の仕組みや仕事のしかたがある程度身につけてきて、所属組織の中でも、自分発信で新しいことを始めるだけの権限を得るからでしょう。「どんな35歳になりたいか」ということを意識して、今から自分自身に投資をしていく意識を持つといい

と思います。

次代を担う皆さんには、ビル・ゲイツやスティーブ・ジョブズなどのように、変革をけん引する「スーパーヒーロー」を目指してほしい。変化が大きい時代こそ、そんなヒーローになる好機です。

旭化成 名誉フェロー 吉野 彰

(日本経済新聞 2020年5月29日号 第二部 1面を引用・要約しました)

吉野先生は、メッセージの中で、次のように呼びかけています。

『皆さんの多くは、これから大学へ進学し、専門分野の勉強を深めていくことになると思います。そのときにはぜひ、広い視野を持って、「どのような社会を作っていきたいか」を意識し続けることを忘れないようにしてください。』

進路学習を進めていく中で、卒業後の進路を考えると、「どこの大学へ行きたいか」「大学で何を学びたいか」を考えていきます。その際、「どのような社会を作っていきたいか」「どのように社会に貢献したいか」を考えていくと、行きたい大学や、学びたい学問を発見できます。それらは大学へ入学したい理由として、そして、受験勉強への最大のモチベーションとして、みんなの心を強く導いてくれるでしょう。